

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04751

研究課題名(和文)「文種別作文コーパス」の構築と中-大連携作文指導法の開発

研究課題名(英文) A study on construction of composition corpus and collaborative composition instruction in junior high school-university

研究代表者

宮城 信 (MIYAGI, SHIN)

富山大学・学術研究部教育学系・准教授

研究者番号：20534134

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中学生を対象として、文種(文章のスタイル)別の書き分けを記録した「文種別作文コーパス」を構築した。当該コーパスによって、これまで教員の経験頼りだった生徒らの言語使用・選択の実態の客観的なデータを提示した。計量的分析を中心として得た結果に基づき、生徒の言語使用(語の選択傾向、語の使い分け、特定の表現の使用と誤用状況など)についての分析成果を複数の論文として発表した(全国誌の査読論文あり)。生徒らに自由な題・雰囲気で作文させたため、くだけた表現や少し気取った表現など多彩な例が収録されている点でも、貴重なデータである。なお比較・検証のために一部小学生や大学生のデータも用いている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、1950年代以来、大規模調査が実施されていない中学生が書く作文の実態調査を実施したことにより、これまで教師個人の経験に頼ってきた作文指導法に新たな知見を加えることができた。また、教科書の課題では、同一学年で複数の文種(文章のスタイル)をかき分ける課題が課されており、多様な文種の書き分けが要求されているが、現場でもその成果物同士を個人で比較する機会は皆無である。本研究では、作文コーパスを利用して、学年別の差異だけでなく、個人内の差異(表現の使い分け)に言及した点で、客観性の高いデータを現場に提供し、作文指導法の改善に示唆を与えた点においても学術的・社会的意義が認められる。

研究成果の概要(英文)：In this research, we constructed a "style-specific composition corpus written by junior high school students". With this corpus, we presented new objective data other than the experience of teachers. The results of quantitative analysis showed the tendency of word selection, word usage, and word misuse. In this data, students also use plain and lofty expressions in part. For reference, data of elementary school students and college students were also used in the analysis.

研究分野：語彙論

キーワード：作文コーパス 言語発達 作文の表現 作文の計量的分析 文章の書き分け

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現在、初中等教育の学校現場での作文指導は、多くの場合児童・生徒の書いた文章に教員が手を入れて書き改めさせるという方法で行われている。この指導法には次の2点で問題がある。(1)文章の修正(指導)が教師個人の語感によって主観的になされていること。(2)児童らによる推敲が、教師案を丸写しすることに留まり、児童ら自身の作文能力、推敲能力が育たないこと。この問題は、教師や教育現場全体の経験知の不足、またそれを補い補正していく資料の不足によるものであり、多くの教師から、客観的なデータに基づく作文指導の資料を求める声が上がっている。現状で利用可能な資料としては『児童の作文使用語彙』(国立国語研究所、1989 東京書籍)、「語彙レベルに基づく重要語彙リストの作成」(田中牧郎 2011、『特定領域「日本語コーパス」平成22年度公開ワークショップ予稿集』)、「作文コーパスからみる生徒の使用語彙」(鈴木一史 2011、同上)等があるが、いずれの研究にも調査資料が古い、語彙の調査に留まる、資料の均質性が十分でない等の問題があり、指導用、分析用の資料として質的にも量的にも十分と言うには心もとない。

このような現状に鑑み、代表者ら「『児童・生徒作文コーパス』の設計」(宮城信・今田水穂 2015a、『第7回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』)、「『児童・生徒作文コーパス』を用いた漢字使用能力の推定」(宮城信・今田水穂 2015b、『第8回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』)といった児童らの作文活動の実態に迫る大規模な『児童・生徒作文コーパス』(300万形態素)を作成し、研究成果を発信してきた。この成果から、少なくとも漢字使用能力等に関して、中学三年生段階での作文能力は大学生にかなり接近していること等が明らかとなっており、語彙、表記、表現、文構造等に着目した分析も進みつつある。一方で、作文の文体は文種によって大きく異なり、それによって指導方法も変える必要がある。そのため、生活や身の回りのことを書いた生活文が中心の『児童・生徒作文コーパス』だけでは研究用資料として十分でないことも明らかになってきた。

そこで本研究では、中・大連携の作文指導を実施し、生活作文中心の『児童・生徒作文コーパス』とは別に『文種別作文コーパス』を作成する。これを用いて説明文や意見文等の文種別の分析や、同年代の作文、大学生の作文、一般的な文章との比較を行う。その分析結果を連携指導に還元し、初中等教育と高等教育を接続する発展的な作文指導法の開発を目指す。

2. 研究の目的

中学校の協力教員と共同で、大学で連携して文種別作文指導法の開発・実践を行う。大学での文章表現の実践を中学校でも並行して実践する、同一課題の連携指導を実施することも視野に入れている。そこで作成された中学生・大学生の作文を資料として7種の異なる文種の作文で構成された『文種別作文コーパス』を構築する。この資料を基に、文種間・校種間の対照分析や他の言語資源との対照分析を行う。この分析を通じて各文種の表記、使用語彙、文末形式、文構造等の文体的特徴を明らかにし、学習者の文種の書き分け能力を相対化する。この分析の結果に基づき文種別の文章構成モデル(書き方)を構築して両校で授業にフィードバックし、発展的な作文指導法の構築と実践に繋げていく。

3. 研究の方法

(1) コーパスの構築

中学校 大学連携指導と作文収集：これまでの指導法による文種別の書き分けの実践を継続すると共に、中 大で同課題に取り組み、互いの文章を推敲し合うという連携指導を実施する等、新しい指導法の開発に向けた取り組みを行う。連携指導も含め、すべての授業

で文種別作文を収集する。綿密な連携と情報交換のため、年 2 回の全体会議を実施して授業の状況、コーパス構築の進捗状況、今後の方向性等について検討を行った。

資料の電子化：代表者らが指導する「国語」および「文章表現法」の授業で作成した文種別作文を複数の学年、複数の年度にわたって収集、電子化し、『文種別作文コーパス』を構築した（これまでの実践で収集した作文も利用する）。本コーパスの規模は、4 学年（中学 1～3 年生と大学 1, 2 年生）にわたり、6 文種（7 作品）、およそ 60 万形態素（短単位）規模である。基本的なアノテーションを付与した本コーパスのデータのフォーマットは以下の通り。

	品詞大分類	品詞中分類	品詞小分類	品詞細分類	活用型	活用形	語彙素読み	語彙素(語彙素表記+語彙素細分類)	書字形出現形	発音形出現形	書字形基本形	発音形基本形
僕	代名詞	*	*	*	*	*	ボク	僕	僕	ボク	僕	ボク
の	助詞	格助詞	*	*	*	*	ノ	の	の	ノ	の	ノ
将来	名詞	普通名詞	副詞可能	*	*	*	ショウライ	将来	将来	ショーライ	将来	ショーライ
の	助詞	格助詞	*	*	*	*	ノ	の	の	ノ	の	ノ
夢	名詞	普通名詞	一般	*	*	*	ユメ	夢	夢	ユメ	夢	ユメ
は	助詞	係助詞	*	*	*	*	ハ	は	は	ワ	は	ワ
,	補助記号	読点	*	*	*	*						
まだ	副詞	*	*	*	*	*	マダ	未だ	まだ	マダ	まだ	マダ
ハッキリ	副詞	*	*	*	*	*	ハッキリ	はっきり	ハッキリ	ハッキリ	ハッキリ	ハッキリ
と	助詞	格助詞	*	*	*	*	ト	と	ト	ト	と	ト
は	助詞	係助詞	*	*	*	*	ハ	は	は	ワ	は	ワ
決まっ	動詞	一般	*	*	五段-ラ行	連用形-促	キマル	決まる	決まっ	キマッ	決まる	キマル
て	助詞	接続助詞	*	*	*	*	テ	て	て	テ	て	テ
い	動詞	非自立可	*	*	上一段-ア	連用形-イ	イル	居る	い	イ	いる	イル
ませ	助動詞	*	*	*	助動詞-マ	未然形-イ	マス	ます	ませ	マセ	ます	マス
ん	助動詞	*	*	*	助動詞-ヌ	終止形-撥ス	ズ	ず	ん	ン	ぬ	ヌ
。	補助記号	句点	*	*	*	*						

本コーパスの基となる作文は、誤字・脱字チェック作業が必要である。学習者の作文には誤字・脱字等が多数含まれているため、使用漢字、使用語彙の調査や、形態論情報、係り受け情報等の付与を実施する前に人手による修正作業を実施した。学生の研究補助者による謝金業務として実施した。さらに、言語学的関連情報（形態論情報、分類語彙表番号等）の付与を実施した。ただし、形態論情報や係り受け情報の付与は、自動解析では多くの誤解析が含まれるので、さらに、人手による修正作業が必要になる。解析から修正までの一連の作業を専門の業者に外注した。（「日本システムアプリケーション」に依頼）

(2) コーパスを用いた分析

H29 年～H30 年は『文種別作文コーパス』の整備を進めつつ、次の観点について文種別の違いと指導資料の作成を進めた。

- 1) 使用語彙・文末形式 副詞や動詞、文末形式に見られる表現意識の分析
- 2) 文連結の種類 学齢の進行とともに見られる接続詞の減少と、接続形式の調査
- 3) 文内容の種類 連結される文の内容の種類、理由を表す文の内容（一般論か経験か）、意見と事実、眼前描写と記憶の区別等
- 4) 文関係の種類 「原因 理由」のような文連結の意味的關係の分析、本研究では、文図中心の既存の作文指導からの複眼的な文章構成モデルを提案での作文指導も実施した
- 5) 一部小学生や大学生の作文データも整備して、比較検討を行う。

4. 研究成果

(1) 『文種別作文コーパス』の構築

成果発表

成果の発表に関しては、H29 年度にここまで得られたデータを利用して全国大学国語教育学科ラウンドテーブル（H29 年度は「これからの「国語の特質」の探求と指導のあり方(2) 新学習指導要領への継承と発展」(於:第 132 回 岩手大会))で口頭発表を行った。発表内容は、

学年別基礎語彙の選定に関するもので、1文種であるが、どのような語当該学年でよく用いられているのかを明らかにし、学年別学習基本語彙表（試作版）を提示することができた。一方で、その妥当性と学校現場での使用方法について質疑があり、今後の課題となった（本コーパスの質ではなく、利用場所と方法の問題である）。これらの研究発表によって、本コーパスに関する今後の研究に関して注意点や修正点といった具体的な示唆を得ることができた。当該発表を受けて、論文化も実施した。

コーパス収録作文について

本「文種別作文コーパス」本体に収録されているのは、協力校である国立大学附属中学校 1、2 年生が書いた、意見文、感想文、鑑賞文、紹介文（パンフレット食レポ含む）等を 40～50 名程度ずつ収集している。かなりの範囲の文種を収集することができたと考えている。現在コーパスの基本部分は構築・修正が済んでいるので、一般的な言語調査に不足はない、今後機会をみてその他の文種も増補していく予定である。現在のところ、試作的に日記の文章も文種別コーパスに取り入れることを予定している。コーパスを構築するという本研究の全体的な計画は予定通り達成している。本コーパスに収録されている文種は以下のようなものである。

- ・意見文： 中学生になって
- ・説明文： 大根は大きな根
- ・鑑賞文： 「最後の晚餐」とは何か
- ・感想文： 「かぐや姫」を読んで
- ・紹介文： 私の大好きな一品、 図書紹介 私の好きな一冊
- ・報告文： ドキュメント 校外学習で何があったのか

データのアノテーションについて

H30 年度以降の中心的な作業は、前年までに電子化を終えたテキストを機械解析して語彙論情報を付したこと、比較に向けてフォーマットを統一する作業を進めたことである（作文は様々な状況で作成されており、単純比較を行うことは難しい）。また個人レベルでの比較を行う目的で同一個人を特定できるように作文別整理番号の名寄せ作業を進めている（個人情報取得しない、あくまで整理番号を介した同定作業である）。

一部のデータはコアデータとして専門業者による修正作業を実施した。分析はこのコアデータを中心に行っている。BCCWJ との連携も意識して、当該データには分類語彙表番号を付与する試みも実施している。語彙カテゴリにも拠るが、これまでと異なった観点から、新たに効果的な分析が進められる手応えを得た。分析作業としては、語種別・品詞別等の観点から数量的な差異を検討した。結果、ある程度の偏りは見られたが、現在までに文種を特定できる特徴を抽出するには至っていない。本研究の探求課題が、文種の書き分けとその計量的分析であるので、研究成果は個別の論文より、単語集・文章用例数と言った資料集として提出できると考えている。現在試行的な分析データの整備を進めている段階である。論文化に向けて、どのような観点からの分析が可能となるか試行錯誤をくり返している。

周辺的なデータについて

本研究での調査は、中学生の生徒が書いた文章を収集することに主眼を置いている。それを相対化するため、すでに収集している児童のデータも比較・検討に用いることとした（児童・生徒作文コーパス等）。対になるデータとして、大学生を対象に類題での課題作文を課しデータを拡大収集している。さらに、一部予定外であるが、帰国子女クラスの文章を検討の対象に入れることにした。試作版では、非帰国子女クラスと比較しても文章量には違いがなく、形態論情報による品詞の偏りも見られなかった。今後は分析の観点を深め、文の構成や具体的な使用語彙の比較にも視野を広げていく。また、最終年度に限定的ではあるが、上記の文種に加えて試作的に日記の文章も文種別コーパスに取り入れている。これによっていわゆる生活作文的な文章を考察の種類に取り入れることができるようになる。国語科教育における文種分類では、生活作文をどう分類するのが問題になっている。本コーパスを用いた分析で、様々な観点から文種の特徴を抽出することができれば、実際に生活作文自体が一つの文種といえるのか、という問いに対しても何らかの回答が得られることが期待される。

データの性質について

今回収集した作文の一部にはタブレット端末から入力された作文のデータもあり（近年の研究では、手書きの文字に対して、「打ち文字」等と呼ばれて質的に違うものとして区別されることもある。）、多様なデータが入手できた。一方で、「打ち文字」は手書きではないことから一部の文字の表記（例えば、漢字使用等）において条件の不統一がある可能性がある。「打ち文字」作文のデータにはタグをつけてあるので、その際が問題になったとき、本コーパスは容易に選別することができる仕様となっている。

中学生が各作文の典型的なものは、論説文や鑑賞文等いわゆる意見文系列の文章である。逆に説明に徹した文章を書く機会は少なく、例えばパンフレットや図書紹介等が少ない機会であろう。本研究でも、協力校から文読書紹介の文章も入手済みであるが、これを紹介文として扱うの

には注意が必要である。多様な文種を収集することが本コーパスの目標でもあるので、収録する価値はもちろん高いと考えられるが、読書紹介においても、書き手の意見と見做される感想や観賞を排除することは難しい(そもそも書くときに生徒にそのような指示をしていない)。収集した作文を一度他の文種の作文と比較して、差異を検討した上で、「文種別作文コーパス」で適切に位置付けていく必要がある。試みに読書紹介を見てみると、口頭発表の下書き原稿的な側面もあり、独立した書き言葉的文章として扱えるか検討が必要である。

書き手の問題にも言及しておかなければならない。同一校の生徒を対象としているが、学年・クラスが異なると学習状況の差等の関係もあり、注意が必要である。具体的にどの程度の差異があるのかの検証も今後の課題である。

学校現場への還元の可能性

本研究では、中学校と大学で連携して文種別作文の実態調査、指導法の提案を実施した。代表者は大学で長く文章作成指導に携わってきた経験がある。本研究では研究協力者である中学教員と密に連絡を取りながら、国語の授業での作文指導について示唆を与えた。コーパスの構築と並行して学校での実践も実施した。一部未完成のデータを現場に投入する目的は、客観的なデータに基づく指導がどのような評価を得られるのか、また何が求められるか、その指針を得るためである。現場からの示唆を受け、構築している「文種別作文コーパス」に追加のアノテーションを実施した。予想外の成果としては、現場で生徒の指導にあたる教員との交流から、学習者が書く作文別に、使用語彙、文末形式、多用される表現等に関する経験知を得ることもできた。それを受けて、実態データを基に小学生や大学生が書いた類題の作文も参照して、本資料の相対的位置付けを行った。その結果、学習者は、題材・内容以外に文種に合わせたいいくつかの書き分けスタイルをもっていることが分かった。

分析の観点

語の使用、文末表現の使用はもとより、本研究における特徴として、固有の表現に着目した分析、すなわち表現の選択傾向や誤用の出現要因等、作文指導に直結する分析を実施したことが挙げられる(次節での理由表現や感情・感覚・評価の表現等)。その結果、学年の進行と語の選択には一定の傾向が見られ、よく指摘される和語から漢語といった単純なものではなく、語別にいくつかの発達パターンを有していることが確認できた。これらの知見は現場での作文指導における具体的な指示の改善に役立つと思われる。今後の課題として、現在当該コーパスに一部分類語彙表番号を付与する作業を実施している。まだ一部に留まるが、いくつかの傾向は見出された。今後同様のアノテーションが十全なものとなれば、この指標によって、さらに詳細な類語の使い分けの傾向を掴むことが期待される。それも文種別の書き分け技術において必要な指針となると考えられる。

研究成果について

本研究の全体の研究成果としては、研究発表5件、研究論文5編(うち査読付き3編)がある。さらに現在本コーパスを利用した研究には着手済みのものが2件ある。

本研究の中心的な成果は、「文種別作文コーパス」を構築し、整備したことであるが、それを用いた研究成果も得ている。以下、論文化した成果の代表的なものの概要を紹介する。

1) 事例研究 : 理由の表現の発達

意見文系の作文に見られる「なぜなら、～からです」型の理由を表す表現の使用と発達について調査・分析を行った。理由の表現は単純なものから複雑なものまで多彩で、学年の進行に従って、複雑化する。理由の内容についても、個人的な思いから、経験、社会的な意義まで多様な展開を見せることが確認された。さらに、理由表現については、いくつかの先行研究によって誤用が多いことで知られている。本研究では、その原因についても分析を行った。その結果、文章校正能力の発達よりも、複雑化する表現の混乱(主に副詞と文末の呼応の乱れ)が優位に機能し、高学年になっても誤用が頻発している実態が明らかになった。

2) 事例研究 : 感情・感覚・評価の表現

作文で使用される感情の表現は多彩である。語彙の使用傾向には、和語 漢語やオノマトペ型 漢語型(または慣用句型)といった予想が立てられる。

怒りの表現を例に取ると、「怒る」(和語型)、「立腹する」(漢語型)、「頭にくる」(慣用句型)、「イライラする」(オノマトペ型)のような類語が併存している。本コーパスを資料にこれらの語がどのように使用され、その傾向が変化したか調査・分析を行った。怒りの表現では、常に怒るが先行し、「イライラする」は一定の使用はあるものも明らかに使用率が少ない。予想に反して、オノマトペ型が避けられる実態が確認される。一方で、「緊張する」「ドキドキする」等の組み合わせでは、低学年ではオノマトペ型が優勢だが、使用実態は、以降ほぼ同率で推移していき、最終的にどちらかに偏ることはない。このように本調査から、単純な予測とは異なり、かなり個々の語彙毎に差異があることが確認された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 宮城 信	4. 巻 15 - 1
2. 論文標題 課題作文の感情・感覚・評価を表す表現の使用状況	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 富山大学人間発達科学部紀要	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮城 信	4. 巻 556
2. 論文標題 児童作文における「理由述べ」表現の実態	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 月刊国語教育研究	6. 最初と最後の頁 42-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮城信・穴田享巳	4. 巻 13-1
2. 論文標題 「児童・生徒の言語生活に関するアンケート調査の分析」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 富山大学人間発達科学部紀要	6. 最初と最後の頁 103-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮城信	4. 巻 1
2. 論文標題 学習指導要領から見る国語の特質の課題	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 言葉の学びを考える	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮城信、伊集院郁子、ノ ジュヒョン、ムン ジーヨン	4. 巻 21
2. 論文標題 「日韓対照大学生作文コーパス」の構想	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 筑波大学日本語研究	6. 最初と最後の頁 19-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 宮城信
2. 発表標題 食レバ作文における食物テクスチャの分
3. 学会等名 表現学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮城信 (他3名、共同発表)
2. 発表標題 これからの「国語の特質」の探求と指導のあり方 (2)
3. 学会等名 全国大学国語教育学会参加 (第132回 岩手大会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮城信
2. 発表標題 これからの「国語の特質」の探求と指導のあり方
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 宮城信
2. 発表標題 児童作文に見る感情・感覚・評価を表す表現の使用状況
3. 学会等名 表現学会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 宮城信
2. 発表標題 日本語相互行為表現を支える述部の語彙論的分析
3. 学会等名 語彙研究会大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	渡邊 光輝 (WATANABE MITSUKI)		
研究協力者	今田 水穂 (IMADA MIZUHO)		